

週刊 沖繩空手


第110号

L.098(860)3552 Weekly Okinawa Karate FAX.098(860)3483 e-mail:oki-karate@okinawatimes.co.jp

琉球泡盛 空手は 沖縄空手を応援しています。

株式会社 久米島の久米仙

新発売「空手 35度7年古酒」



術理求め「柔体」深化

沖繩空手道松林流喜舎場塾 新里勝彦塾長(80)

「力(Force)を抜くと、力(Relaxed Power)が出る」。この矛盾する言葉が沖縄空手道松林流喜舎場塾と那原町の新里勝彦塾長(80)の技に触れると、大きな説得力を持つ。筋力「剛体」に頼らない力を抜いた状態で技を繰り出す「柔体」で相手に対峙する。「ナイハンチ腰」を土台に60代後半から編み出した独自の術をさらに深化させるため、今も「も」を磨き続けている。

(運動部・新垣亮)

首里手の中核型 土台に

剛体は「屈筋主導」で、柔体は「伸筋主導」の身体だ。首里手の中核型である「ナイハンチ」の所作が柔体で練られている。その技動作はしなやかで張りがあがる。筋力は加齢とともに衰える。しかし柔体による骨格操作法を身に付ければ、生涯現役でいられる。新里塾長はその操作法を「術」と呼ぶ。その術理はナイハンチ型で自得できるという。

法を三通りに分けている。①腰(股関節)や体を締めたる屈筋主導による剛体技法(一般的な空手)②ナイハンチ腰(股関節の弛緩)による伸筋主導の骨格操作による脱力技法③は②による合気的接触技法だ。分かりやすく言えば①は「打つ」(Hard contact method)②は「当てる」(Light contact method)③は「触れる」(Soft contact method)となる。

特に③の「触れる」の身体操作に行き着けば、体格や筋力差を問われない。合気道に近く、「体格や筋力で勝る相手にも通用する技」を繰り出す身体が、すなわち「脱力体」なのだという。「相手の筋力が反応する前に、コントロールをする世界」(新里塾長)だ。「脱力体」のイメージは建築の免震構造を示す「テONSEクリティ(柔軟構造体)」で解説される。攻防の技が柔軟な骨格構造体から繰り出されると武術的な



柔軟構造体の模型を使い、「柔体」の動きを説明する新里勝彦氏

力になるのだという。「力を抜くと、力が出る」とは端的に言えば、「伸筋力は屈筋力に勝る」ことを意味するという。

骨格操作に主眼

新里塾長は1939年に生まれ、57年琉球大学に進学し、空手クラブで空手を始めた。卒業後は中学の教諭をしていたが、64年米国に留学。帰国後、世界松林流空手道連盟総本部(宗家・長嶺将真氏)で再修練した。81年全沖縄空手道連盟



全沖縄空手道連盟主催の大会で「シントウ」を演武する新里勝彦氏。高野清市・沖縄大体育館(1980年代、提供)

の分裂後、高弟の喜舎場朝啓氏の下で研さんを積み始めた。98年に沖縄空手道松林流喜舎場塾結成。2000年に喜舎場師範が逝去した後、塾長となった。

喜舎場師範は「一撃必殺」の剛体一辺倒による空手に懐疑的だった。骨格操作に主眼を置いた稽古の在り方を模索しており、その理論を掘り下げたのが新里塾長だ。稽古場では「柔体による身体機能の潜在能力を引

米国フロリダのセミナーで技法指導する喜舎場朝啓氏(右)と新里勝彦氏(1987年、提供)

沖繩の空手は型の保持と継承、身体の鍛錬法として、は伝統的に優れたものがある。一方で、技法上の伝統はどう受け継がれてきたのか。唯一無二の型に磨きをかける新里塾長は身体操作の在り方をさらに探求し、これからも「普通の術」を追い求める。



稽古に励む門弟と写真に納まる新里勝彦氏(前列中央)

ロイハイを披露する新里勝彦塾長(与那原町・沖縄空手道松林流喜舎場塾(落合綾子撮影))



おとわり 「道場めぐり」と「熱視線」は休みました。